

いきいき 行人

生涯をかけて読書に打ち込む

大槻 咲男さん（80歳・長野）

書齋にある溢れんばかりの本に囲まれながら、「お目当ての本を探しに行くときは、皆さんが大好きな人に会いに行くときの気分と同じですよ」と読書への思いを語るのが、今月紹介する大槻咲男さんです。

映画を観ることやラジオを聞くことなどが、まだまだ足りないような娯楽だった少年時代、それほど裕福な家庭環境ではなかった大槻さんにとって、一番の楽しみは本を読むことでした。「親から小遣いをもらうと、真っ先に古本屋に向かいました。正義感溢れる主人公が活躍する本が大好きで、いつもワクワクしながら読んでいました」と語る大槻さん。読み終わった本を友達同士で交換し、物語に描かれた主人公になりきって、遊ぶことも大好きだったそうです。また、学校の授業では先生から指名され、クラスメイトの前で読み聞かせも行っようになりました。「先生に読み方を褒められることがうれしくて、繰り返し本を読みました。今でも当時読んだ本の内容を覚えて



いますよ」とうれしそうに話をしてくれました。思春期を迎えると、太宰治や島崎藤村などの作品に強く共感を抱くようになりました。「これらの作品には、人生をどのように生きていくべきかが書かれ、私の心にピタリとはまるものばかり」大槻さんは高い芸術性を持ちながら、現実的でなおかつロマンチックに表現されている純文学作品のとりこになってしまいました。

20歳の時、小学校の教師となった大槻さんは、子供たちに豊かな心をはぐくませようと、少年時代に夢中になった本の読み聞かせを行ったり、より一層子供たちのことを理解しようと教育学の本を数多く読みだりました。しかし、教員生活を送る中で、問題がある教員の子供のことや職場でのストレスなど、家族にも相談することができず、思うようにいかないことも。そんな時、大槻さんの心の支えとなったのがやはり本でした。「困難に直面したとき、本を読んで救われたことが多くあります。『自分は筆者と同じ考えなんだ。同じ仲間がいるんだ』なんて思えるようになるんです」こうして本は、大槻さんの人生にとって欠かせないものとなっていききました。

定年退職後、20年がたった現在でも月に15冊ほど本を読む大槻さん。1カ月に3回「日本人論」の講話を行っています。その資料集めの手段は決まって読書。生涯読書を心に決めている大槻さんは「死んでも本を離さないでしようね」と冗談を交えながら語ってくれました。

私の作品

俳句

緑町 鈴木喜久女

洗濯物たたき干す日や鴟日

城西 榊原しずか

風呂敷の自由自在や秋の雲

荒木 島田 香子

秋時雨止みて淡き灯飛び石に

荒木 藤田 栄之

肩に来て吾に目を剥く赤とんぼ

須加 原 ちか子

コスモスの虫と語らい風に舞う

城南 町田 達男

かさかさと落葉を踏んで散歩かな

城南 関口 操

雲の峰越えて飛び来る渡鳥

城南 千代田富子

つくし組ちどりあしにて運動会

富士見町 森 節子

七五三静けき社華やきて

前谷 町田 貞子

茄子の葉に親子のバッテリー休み

空中に丸を書き秋すつぽりと

前谷 石井マサ子

長き夜の言の葉潜め万華鏡

谷郷 富山 由喜

朝の径寒くなったと合言葉

城西 西田吉之助

人垣に福島の梨秋祭り

荒木 蛭間しげ子

見た浮き世観せ合つ笑顔敬老會

向町 渡月 峯

(木島 斗川 監修)



『のぼう様ご一行』（紙粘土）
吉田 初代（持田）

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日まではがき・封書で広報広聴課へご応募ください。